第５回総合計画審議会（共創チャレンジ１部会）

― 議事録（要旨）―

■日時：令和７年１月１６日（木）１０：１０～
■場所：糸島市役所　市民ホール

（出席委員）
古相部会長、松尾委員、三井委員、辰巳委員、工藤委員、伊原委員

（事務局）糸島市
企画秘書課　中村部長、合六

【議事概要】

■　部会
３　協議事項
➢　**共創チャレンジ１　子ども・若者が目標を持ち、自ら取組むことができる環境づくり**

●　事務局素案について、事務局から説明
■：委員、○　事務局

・進行を古相部会長へ
以下、古相部会長による議事進行

■　辰巳委員
子どもたちが目標を持ち理想に向けた取組を行った際、結果的に糸島に残らなくなってもいいのか、あるいは糸島の産業をベースに糸島に残るようなことを考えるのか。糸島に残ることを前提とすると、アクションが絞られるのではないかと思うが、絞らないとなると、子どもたちが糸島からいなくなることが懸念される。福岡市は理系の就職先が少ないため、理系の子どもは転出してしまう。同じようなことが糸島でも起きてしまうのではないか。

○　事務局
各個人に夢や希望があり、糸島を出て希望を達成することも考えられるため、市内だけに限らず意見を出していただきたい。
ただし、まちづくり市民委員会から、「子どもたちは糸島市内の事業者、仕事を知らない」「糸島の仕事について子どもたちに知ってほしい」「職場体験」といった意見も出ているため、糸島に住む子どもたちに糸島の仕事を分かっていただきたいと考えている。

■　古相部会長

子どもたちはいろんなことを学んで出ていく可能性はあるが、糸島でどのような企業、産業、働く場所があるか明示することが大事である。

「職業体験」の意見について、農業や漁業といった職種もあるが、小学校で職場体験は実施されているのか。

○　事務局

農業体験は、各小学校で実施されている。中学校では職場体験授業として、農業や漁業、企業、市役所等、幅広く職業体験を実施している。

■　古相部会長

農業であれば苗づくりから始まって収穫作業まで何回か行って体験しないと、何が大変なのか、何が楽しいのかわからない。漁業体験であれば、漁船に乗せてもらう等、踏み込んだ体験ができたらいいと思う。

アクションアイデアの２点目にある「起業家や人生の先輩による講演」について、コロナ以降同様の取組が増えているが、起業した社長の話聞いて、そうなりたいと子どもたちが思うのか疑問である。

■　辰巳委員

宇宙飛行士であればわかりやすい。

■　古相部会長

はい。宇宙飛行士の話を聞く機会は滅多にない。知らない世界の話であえば興味を持てるかもしれない。

■　辰巳委員

製造業がわかりやすいと考えられる。土木を含めて、橋を作る、自動車を開発する等、モノづくりはわかりやすい。

■　工藤委員

どの年齢層に向けて、どういう人の話を聞くかにもよる。例えば小学生、中学生であれば、意見で出ていた宇宙飛行士等の話を聞いたら夢があり、目指したいと思うかもしれないが、高校生、大学生になると、現実的な目線を持ち、サラリーマンとしてどういう業種があるのかといった具体的で現実味のある話を聞いた方が、どういう業種に進みたいかイメージが湧きやすいと思う。レイヤーに合わせた講演があっても非常に面白いと思う。

■　辰巳委員

高校生でも文理選択をする１年生前半がいいのではないか。

■　松尾委員

福岡市内の高校の一例だが、年１回、様々な業種の人たちの話を選択して聞く機会がある。高校生になると、自分の将来を真剣に見据え、その専門性をどうするか考えるため、高校生にはそのようなやり方が合っていると思う。小学生はどういった職業があるかわからないためメディアの影響が大きく、夢はスポーツ選手と言う子どもが多いが、それもすごくいいことだと思う。中学校では起業家教育を実施しており、実際に自分たちで会社組織を作って、モノを売るところまで行っている。ただし、起業して利益を出すところまでの教育はできていないところがある。

年代に適した教育により、職業にいろんな選択肢があることを伝えていただくことが大事だと考える。

■　三井委員

知る、ということは入口としては大事だと思うが、知識を持つことと、目標にすることには乖離が大きいため、そこの間を埋めることも大事だと思っている。その観点から、キャリア教育の見直しや中身の精査、時代に合わせたキャリアプランの生成を、若年のころから実施してはどうかと思う。

大学でキャリア教育を実施しても、すでに学部に入っているため、制約がある中でのキャリア教育になる。そこで初めて理系の職種に就きたいと思ってもタイミングが遅い。もっと早いタイミングでキャリア教育を実施してはどうか。

今、起業家がフォーカスされていて、大学に講演に来ていただく機会が非常に多い。選択肢としてはあるべきとは思うものの、９割以上の学生は会社員として就職していくため、割合としてはそちらも均等に情報提供していくべきなのではないか。起業家に傾倒しすぎるのも良くないのではないかと思うため、アクションアイデアに「起業家や人生の先輩」と記載するより「実務家」の表現の中に、「起業家」が入るイメージの方がいいのではないか。

■　古相部会長

大きな企業も起業から始まっていることであり、起業を目指すこともいいと思うが、うまくいくケースはそれほど多くない。

また、様々な職種があることを小学校、中学校、高校の先生は実際知らない。希望の職種が決まっていない状態の子どもたちに対して、職種や希望を叶えるために何が必要なのか提示するため、先生へのキャリア教育が必要である。起業家だけを選ぶのではなく、三井委員のご意見のとおり、体系的に職種がわかるようキャリア教育の見直しが必要ではないか。

また、情報発信に力を入れることも必要である。どのような職種に就きたいか決まっていない大学生も多い。高校生までに、希望の職種を選べるような声掛けができればいいと考える。

■　辰巳委員

文系の大学では、就職活動の段階でもまだ決まってない場合がある。

■　松尾委員

子どもたちは知識ばかり得てしまい、成功体験が少ない。失敗してもいいからやりたいことをやっていいという教育を行う必要がある。今の子どもたちはチャレンジする選択肢はたくさんあるものの、親が忙しいこともあり、親が育ってきた経験値の中で子どもをコントロールしようとするのではないか。学校の先生が職種を知らないこともあるが、親たちにも知識がつくといいのではないか。

■　辰巳委員

親が子どもに関わりすぎていることもあるのではないか。昔は子どもが多く、親は自分のことも忙しいため、子どもたちに全部構うことができなかった。親がレールを引くことにより親と似た環境しか子どもに与えないことになる。

■　古相部会長

子どもができるところ、得意なところを伸ばす教育ができたらいいと思う。日本はできたところを伸ばすのではなく、できないことを否定するところで育ってきたため、どうしても自己有能感が低くなる。

■　辰巳委員

欧米の人たちは、少しできたことを自信満々にできると言う。

■　松尾委員

日本人はプレゼンテーションで負けてしまう。日本の製品がものすごくよくても、日本人は引いてしまう。

■　古相部会長

間違ったことを言わないで正確なことを言おうとする。日本人の資質である。講演もいいが、どのような話を聞かせたら子どもたちが夢を持つことができるのかということが大事である。

■　辰巳委員

ここで議論していることは、学校の教育現場での話ではなく、日曜日にイベントを開催するようなイメージか。

○　事務局

様々なステークホルダーと協力して共に創り上げることが共創チャレンジになる。例えば、イベントをする際も、いろんな業種の方やステークホルダー、大学の先生や市民等、いろんな方に入ってもらって事業を作り上げていく。アクションアイデアのご意見をたくさん出していただきたい。

○　事務局

オンラインの居場所の中で体験活動や習い事等に参加するような企画もできたらいいとも思う。

■　辰巳委員

一部の人を集めての企画は総合計画としていかがか。底上げ的な話で、ある程度行き渡らないといけないとなると、学校教育でないといけないのでは。あるいは、町内会や子ども会といった大きな単位で行き渡るものとしてやるのか。イベントを開催しても一部の人の参加になるため、イベントの開催だけでは、総合計画としてよいのかが気になる。

○　事務局

初めは少数かもしれないが、それが広がって全体の計画の中に繋がっていけばと考えている。様々なステークホルダーが話し合いの段階から知恵を出し合い事業として組み立てていくということを５年間で実施していく。

■　辰巳委員

具体的に実現できるかどうかわからないことも後期基本計画の中に記載するのか。

○　事務局

大枠として記載していく。事務局素案として出しているのは、「子どもや若者の居場所づくり」ということで、居場所はたくさんあり、様々な事業もできる。その中で、今アイデアとして素案を持っている。それに加えて、先ほどのご意見のような仕事の話は事務局素案にないため、子どもたちが地域の仕事や日本の仕事を知る機会について、まちづくり市民委員会からの意見も出ていたため、今後検討していきたいと考えている。

■　辰巳委員

アクションアイデアを見ると、かなり具体的であり、総合計画ではなく実施計画や担当課の一事業としての議論ではないかと思う。

○　事務局

実施計画のような意見もあるが、大きな括りとして意見を出していただいた方がいい。

■　古相部会長

講演活動を実施すること自体はいいとは思う。ただし、内容としては起業家ではなく、糸島で実際に働いている人たちや、新しい取組みに挑戦している若い人たちの話を聞いた方がいいと思う。

○　事務局

先ほど「起業家」という言葉に違和感があるという意見もあったため、「実務者」という言葉を取り入れることや、「年代に応じた取組」等も修正・追記を検討したい。

■　古相部会長

実際に働いている人の話を聞いてみると、意外と面白いと思うこともある。近所で働いている若者が、どう働いているかを知るような講演もいいと思う。起業した成功者だけでなく、地道に働いている人や、企業の若手がなぜそこに就職して、先々どう考えているのかを知る機会を行政がセッティングしてくれたらいいと思う。

○　事務局

行政が仲介して、いろんな方を集めて、どう事業化していくかというところを５年間で作り上げていく。予算が必要な場合は、市の予算も確保しながらいろんな方の協力を得ていきたい。

■　古相部会長

そういった取組を実施することで、学校のキャリア教育も変わっていくかもしれない。

○　事務局

はい。共創チャレンジで少しずつ実現していくことで、教育も、今行政が行っている事業も広がり、繋がればと思う。

■　三井委員

子どもの居場所という議論の中で、子ども側の話が多かったが、提供者側のニーズもあるのではないか。教育にエネルギーをかけたいと思ってらっしゃる事業者の方々と立場上お会いする機会があるが、どこに相談したらいいのかわからない、思いはあっても、提供する場やマッチングできる場所がないという声を聞く。講演会のようなスポットの取組もいいと思うが、常にある窓口や場所の設置ができるといいのではないか。

■　松尾委員

実施する期間を限定することも考えられる。例えばアメリカやヨーロッパでは夏休みがすごく長く、自治体などいろいろな機関がハブになりサマースクールを企画する。キャンプや博物館、美術館、漁業者とのフィッシングなど、多種多様なことができる。お金が必要な場合もあるため、何を選択するかは家庭によるが、行政が１つの窓口になって、学校ではないところに行っていろんなイベントが夏休みだけある。糸島の場合、歴史資料館や図書館を活用することで子どもたちの居場所づくりにつながると思う。様々な場所や機関と連携した活動に参加し、いろんな経験ができることは保護者にとっても嬉しいことである。

■　古相部会長

オンラインや自習スペースの確保だけはなく、居場所で実際に体験できる場所を検討していただきたい。

■　松尾委員

歴史好きな子どもは歴史資料館、 絵が好きな子どもは美術館、小学校の体育館や運動場を使って、大学生にサッカーを教わる等、いろんなことを体験できるようにするといいと思う。様々な体験をすることで、興味があるもの、好きなものが見つかるのではないか。

■　伊原委員

どういう職業を選ぶか、どう生きたいかを実際の居場所や先輩たち、実務家の方の意見を聞くことで醸成されていくのではないか。糸島は、農業に転身された方がたくさんいらっしゃるため、農業に就いたら一生農業だけ、会社員だったら一生会社員といったことはない。ピボットができるような人選も考えていいのではないか。知っている方だと、農業のコンサルタントと居酒屋を経営して、地元の農業や漁業の方と関わりながら新鮮な魚を仕入れているような働き方をしている人もいらっしゃる。自分がどう生きたいか、１つ仕事を選んだから終わりではなく、その先には、別の生き方もできるんだという選択肢があることを知るという機会が大事ではないか。

■　古相部会長

私もそのような人の話が出たら面白いと思う。お店を出すことに何が必要なのか等、聞くこともできる。

■　伊原委員

なぜ職を変えたのか、どういう軸があり判断したのかという話を聞くことは、子どもにとってすごく興味があると思う。ある程度進路が決まった子どもにとっても、別の道もあるという一つの気づきにもなる。

■　古相部会長

糸島では副業的に小さなお店を出店して、軌道に乗ると本格的に職業にするようなことが増えている。

■　松尾委員

副業ありきの時代になっているため、いろんな体験をすることは大事だと思う。

○　事務局

理想に「挑戦」という文言を入れているが、失敗を恐れず挑戦していく子どもたちになることが理想と考えている。「自ら取り組み挑戦することができ、将来に対する夢や希望を持つ」子どもたちが増えることを理想としているため、いただいたアクションアイデアを参考にさせていただきたい。

■　松尾委員

チャレンジできる場所がたくさんできたらいいと思う。

■　辰巳委員

いろんなことをどういう場でやるのか、場作りが行政の役割だと思う。具体的に何をやるかは今後考えていい。そうした時に、日本の仕組みの中でひとつあるのは公民館であると思う。公民館には高齢者向けのヨガ教室など色々ある。そういったメニューも、子どもたち向けにたくさん作ればいいのではないか。夏休みに公民館を活用して実施することで、ある程度広がっていく。行政が予算をつけて様々な取組を進めることが日本の仕組みの中では一番いいのではないかと思う。

■　古相部会長

福岡は公民館が充実している。

■　松尾委員

糸島は高齢者が多いが、文科省からも地域・家庭・学校で、子育てをすることを掲げているため、公民館を中心として実施していただけたらいいと思う。

■　古相部会長

次第に広がっていけばいいと思うので、とりあえず始めること、アクションを起こすことが大事である。

■　松尾委員

勉強を教えたい大学生がいたら、公民館で教える活動があってもいいのではないか。企画は様々なことが考えられるが、まず場所が必要になる。

■　辰巳委員

計画には成果指標を定めてＰＤＣＡサイクルで検証していかないといけない。コミュニティセンター何か所で実施するという目標を立てて、それが実行できているかどうかを検証することで、検証もしやすいのではないか。

■　松尾委員

期間を決めて取り組むといいと思う。

■　古相部会長

様々な意見を参考にして、取組に繋げていただきたい。

（共創チャレンジ１部会　終了）